

造形表現を拓く自然材の可能性

—幼児の“造形的遊び”についての事例的考察—

石倉 卓子*・竹井 史

Natural Material and Naturally Environmental Possibility
to Open up Molding Expression
—Consideration of the Molding Play in Infancy—

Takako ISHIKURA, Hitoshi TAKEI

E-mail : takei@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：自然材 造形表現 造形的遊び 美術教育

Keywords : natural material, naturally environmental, molding expression, molding play, art education

はじめに

幼児は日常生活において実に様々な形で自己表現を繰り返している。感じたり考えたりしたことを声や表情、動作で表したり、音や色、形などを媒介にしつつ表現を繰り返している。造形表現に限って言えば、つくる、描くなど、色や形による表現方法があげられる。造形をもとにした活動は、幼児が最も好む活動の一つであり、幼児教育現場では、砂や土、草花などの自然材、空き容器や空箱などの不用材などによる造形遊びが毎日のように繰り返されている。

ところで、それらの活動を詳細に観察すると、活動の結果がいわゆる作品作りというよりは、感覚的な遊び、素材操作の過程そのものを楽しむもの、偶然に生まれた造形のおもしろさに出会う体験であったりする。そして、そこでは造形作品に向かう以前の連続、非連続的な活動そのものに価値を見いだされ得るものが多いことに気づく。このような造形的な遊びは、例えば、最終的に作品になるといった造形活動としての明確な形を伴わないことが多く、研究対象としてとらえられることも少ない。

しかしながら、それらの活動は幼児の遊びや造形活動の質や広がりやを決定し、その後の造形表現を拓いていく上において重要な意味を持っていることが経験的に知られている。それ故、この活動の内容とその意味を明確にすることは、幼児の遊び、もしくは造形活動の有り様を知り、活動を活性化する環境づくりを解明する上において重要な作業であるとい

える。

本研究では、幼児の自然材にかかわる遊びから、幼児が造形的な要素に出会う活動全般を一旦「造形的遊び」と定義し、幼児がその活動においていかなることを経験し、遊びや造形表現を拓く発露を得ているのかについて事例を通じ探りたい。その上で、「造形的遊び」がもつ内容の広がりや意義を示したい。

1. 「造形的遊び」について

考察を進める前に、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領での造形的な遊びにかかわる記述、さらにここで対象にする「造形的遊び」においてどのようにとらえられているかを確認しておく必要がある。

幼児は、言葉、身体の動き、造形などを単独の方法で行うというより、それらを取り混ぜた未分化な形で表現することが多い。そのため、幼稚園教育要領の領域「表現」⁽¹⁾では造形についての直接的な記述は見られない。未分化な表現の例としては、絵を描きながらその内容を言葉や動作で説明するなど、自らの気持ちを声や動作、物などで補いながら表したり伝えようとしたりする様子が見られる。このように様々な表現する楽しみを十分に味わうことでやがて、より分化した表現活動に取り組むようになる、とある。さらに、表現のねらいには、いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつこと、感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむこと、生活の中でイメージを豊かにし、

* 富山大学大学院教育学研究科 富山大学人間発達科学部附属幼稚園

様々な表現を楽しむこと、とある。

内容の中で造形的遊びにかかわるものとして挙げるとすれば、「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする」「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」「感じたことや考えたことを自由にいかしたり、つくったりする」「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」「いかたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする」等が考えられるだろう。

他方、小学校学習指導要領解説図画工作編⁽²⁾

では、表現のねらいの一つに、「材料などをもとにして、楽しい造形活動をする」とあり、それを「造形遊び」としている。また、児童の生き生きとした造形的な遊び（＝造形遊び）について、砂や土、人工物などの形や色などから思いついた活動を意のままに進め、手がけた材料の形などから新たな発見をしたり、自ら形などを変える面白さを楽しんだりする姿をあげている。ここでは、造形作品を作ることそのものを意図するというよりは、造形活動そのものの過程を楽しむ感覚的な遊びや、造形的な創造活動の体験そのものを深めることを重視している。

では、本稿で提示している「造形的遊び」との比較について言えば、どのようなことがいえるのだろうか。幼稚園教育要領における表現についていえば、先に示したように、造形に関する直接的な記述が見られず、それ故、素材体験、素材操作への価値付けや造形表現活動そのものに対して言及されていない。もちろん、それは幼児の表現活動が未分化であることから、そのような記述がなされているわけである。しかし、幼児の造形的と言える活動は、幼児の遊びの中で明確に表れており、そのプロセスに表れる造形活動の内容や意義を追求していくことは、「造形的遊び」を追求していくことであり、造形表現をより豊かにしていく上で必要であると考えられる。

また、小学校における「造形遊び」との関連について言えば、小学校における造形遊びは必ずしも造形作品を意図しない、造形活動そのものを楽しむ感覚的な遊びや素材操作等について言及されている。この点では、「造形的遊び」と近いニュアンスをもつものといえる。しかしながら、「造形遊び」は小学校の学習内容における題材の設定により、活動の内容が示された造形行為（例えば、つなぐ、積む、など）やその評価に制約を受ける。そのため、連続

的もしくは非連続的に展開される子どもの「造形的遊び」における幅のある活動を包摂することができない。また、造形内容が特化されることで、子どもの興味・関心、意欲などが欠如しがちである。それ故、その制約を受けない「造形的遊び」の観点から「造形遊び」のもつ内容をとらえ直すことは、子どもの造形表現をより生き生きと展開する可能性を有していると言える。

このように、「造形的遊び」の位置づけは、幼児や児童の表現における造形活動の内容や意義を明らかにする上で重要な観点であるといえる。

以下では、自然材にかかわって自然発生的に表れる幼児の「造形的遊び」に着目し、その内容や意味を事例を通して考えてみたい。

なお、本文中の画像や事例は、17年4月～17年6月に石倉が富山大学人間発達科学部附属幼稚園における半参与観察によって採取したものをもとにして

2. 「自然材」を使った造形的遊び

土や石など、自然の中に存在するものは、その一つ一つに固有の表情があり、形や色、質感などが実に多様である。また、想像をかきたて、それらを見立てて遊ぶことのできる多様な可能性を内包していると考えられる。ここでは、そのような自然の「材」を自然材（風や光も含む）をとらえ考察を進めたい。

幼児が自然材とかかわる様子を観察すると、およそ次のような遊びが挙げられる。

砂場の中にぐっと手を入れて、砂のザラザラした質感やひやりとした温度を楽しむなどの「感触を楽しむ」遊び、土に水を加えてとろとろにしたり、赤土を乾かして固くしたりして遊ぶなど、質感を変化させて「触覚的な変化を楽しむ」遊び、砂に水がしみこむ様子や池の波紋を見るなどの「視覚的な変化を楽しむ」遊び、石と石を鳴らすなどの「音を楽しむ」遊び、ハーブでジュースを作るなどの「匂いを楽しむ」遊びなどがある。

これらの遊びは、言うまでもなく五感に基づく感覚的な要素が強い遊びであり、単独でそのものを楽しむ場合もあれば、その遊びが重なり合っている場合もある。また、造形的遊びとして造形表現の過程で現れる場合もある。

それ以外には、砂場で山や川を作る、土や葉っぱや小枝でケーキを作るなどの「具体的にイメージし

たものを作る」遊び、たまたまできた物でお店屋さんごっこに発展したり、始めから団子屋さんをしようとして泥団子を作ったりするなどの「ごっこ遊びに必要な物を作る」遊びがある。これらの遊びは、思いや考えを具体的な形にする要素が強い遊びであると言えよう。

このような幼児の造形的遊びに関して、竹井はその質的な違いから、「感覚的な遊び」、「造形遊び」、「ごっこ遊びのための造形遊び」等の三つの発展プロセスをあげているが⁽³⁾、「具体的にイメージしたものを作る遊び」が「造形遊び」、「ごっこ遊びに必要な物を作る遊び」が「ごっこ遊びのための造形遊び」にあたると言える。

本稿では、自然材にかかわる造形的遊びについて、(1) 主として視覚的な変化を楽しむ遊び、(2) 主として触覚的な変化を楽しむ遊び、(3) 具体的にイメージした物を作る遊びについて事例を挙げ、以下の造形的遊びによって生み出される感覚や意識の変化、自然材の特性から生まれる幼児の造形表現を、観察者のとらえた視点で考察していく。

(1) 主に視覚的な変化を楽しむ遊び

① 赤土の模様遊び <6月 年長児>



この写真は、前日作ったとろとろの赤土カレーの水が蒸発してムース状になったものである。幼児は、指でそっと触ってみる。少しへこむ。何度か触ってみる。今度はシャベルでそっと表面を触ってみた。

跡がつく。もう一度隣に跡をつけてみる。容器の丸みに沿ってどんどんハンコのように跡をつけていく。跡がくっきり残る。やり直しはきかないため慎重に場所を定めながら進めていく。シャベルの方向を変えてみる。違う跡がついた。真ん中が空いている。ここにも跡を付ける。花の形になった。最終的には左右対称の模様になっていった。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

○ 赤土を指で触る

- ・昨日の赤土カレーとの質感の違い
- ・視覚的な気付き
- ・触ってみたいという欲求
- ・指で触った感触の心地よさ
- ・指の力と赤土のへこみの関係
- ・模様がつく性質であることへの気付き
- ・別の道具で赤土に跡を付けてみたらどうかという発想と欲求

○ シャベルで触る

- ・シャベルの堅さと赤土のやわらかさの関係への気付き

○ シャベルで跡をつける

- ・赤土の跡の形への気付き
- ・指跡とは違う視覚的なおもしろさ
- ・シャベルの形への気付き・興味
- ・シャベルの方向を変えてみようという発想
- ・同じ形の連続性による視覚的な心地よさと全体的な模様としての視野の広がり

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

この事例では、赤土がムース状であり、幼児にとっては新たな質感との出会いであったことが興味を生み、造形意欲を大いに高めている。また、若干の水分を含む赤土は独特の感触であり、ある程度弾力も感じられる。また、視覚的には跡がくっきり残る性質をもつ状態であったことなどが考えられる。このような特性が幼児の遊びを広げ、深めている。幼児は赤土とかかわっていくうちに、赤土の質感や視覚的な変化に気付き、赤土に対する興味を変化させている。そしてそれが、赤土に対する表現の変化につながっている。言い換えれば、幼児にとっての赤土が“触ることを楽しむ対象”から“描くことを楽しむ対象”へと変化したと言える。楽しさの質が

変化したとも言えるだろう。また、この事例では、視覚的な気付きが触ってみたいという欲求を誘発したり、触覚的な行動が視覚的なおもしろさを生んだりしており、視覚体験と触覚体験が次々と味わえるこの赤土の状態が幼児の様々な興味や表現を喚起している。

② 砂場での模様遊び <6月 年長児>



写真は、砂場での活動の後、記録したものである。最初、幼児は丸い容器を逆さにして砂に押しつけた。丸くて立体的な形ができた。もう一度やってみる。今度は容器の輪郭の丸い跡が線で残っただけだった。今度は容器を回転させながら深く押し込んだ。しっかりとした丸い形ができた。容器の丸い形をどんどんつなげていった。途中、何度かきれいな丸い立体にならないこともあったが、何度も同じ場所で力を入れ直し、欠けることのない丸い形を作っていた。完璧ではないが丸い形をつなげて円の模様ができた。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

○ 容器で丸い形をつくる

- ・容器で丸い立体的な形ができる驚き
- ・いくつも作ってみたいという欲求
- ・不完全な形に対する不満と追求
- ・力加減、手の操作、出来上がる形の関係についての理解
- ・きれいな丸い形ができたときの気持ちよさ

○ 丸い形をつなげて円にする

- 丸で円を描いてみようという発想

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

この事例は、砂場環境において生み出される可能性が大きい造形的遊びである。崩れやすい一方、単

純な形態を作ることのできる可塑性を有する砂の性質は、幼児にとって何度でもやり直しがきく安心感ももてる自然材といえる。

前半は、容器の形と砂にかかる力で生まれた造形と言える。前述したムース状の赤土も力の作用で跡がついている点では同様だが、乾燥した砂は、崩れやすく、線のような細い跡はつきにくい。形を生み出すには比較的大きな力を加えることが要求される。幼児にとって砂に力をかけやすく握りやすい大きさや形の容器がそれを可能にしたと推察できる。また、ここでも幼児の造形的遊びに対する意識の変化がみられ、砂は「立体的な造形を楽しむ対象」に加え、「平面的に描くことを楽しむ対象」へと興味移行しており、楽しみ方の変化がみられる。前半の造形的遊びでは、視覚的に満足のいく造形表現をしたいという欲求が触覚的な力の作用に変化を及ぼし、その両者の関係が満足できる形作りにつながることを経験している。

後半の連続性を楽しむ造形的遊びは、前半で一旦完成された立体的な造形が、次の造形の手段における一つの単位となっている。この単位が、2つ以上並んだときに点と点が視覚的に結ばれ、線としての意識が働いた上での発想と考えられる。この造形意識の移行は、他の造形的遊びでも生かすことが可能な表現であると考えられる。

③ 土のかたまりを積む遊び <6月 年長児>



幼児が泥粘土山から固まりを拾ってきた。それを見た他の幼児も集め始める。どんどん集めていくうちに、積む・長くする活動が始まった。今度は、泥粘土山にひびが入っている部分を崩して固まりを集め、積み始める活動へと発展していった。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

- 土の固まりを集める

・泥粘土の形状や質感のおもしろさを感じる
 ・集める楽しさを味わう

- 並べたり積んだりする

・形状や質感から、並べたり積んだりする発想が生まれ、試してみる
 ・もっと長く並べたい、積みたいという欲求
 ・もっと集めたいという欲求

- 土の固まりを泥粘土山から崩してとる

・泥粘土山の割れ目に泥粘土の固まりを感じる
 ・固まりとして崩してとる

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

普段泥粘土山では、水をかけて滑ったり、水で柔らかくして団子を作ったりして遊んでいることが多い。この日は、泥粘土山が少し乾いた状態で、山の端からその固まりが崩れ落ちていたことにいつもと違う泥粘土の質感を見出し、興味をもった。この土の固まりは表面はしっとりしており、適度な粘りがある。また、どっしりとした重量感がある。最初は泥粘土の固まりそのものに魅力を感じて集めることに興味を持っていたが、この質感や大きさから、また、ある程度数が揃うことで、並べる・積む、という遊びが可能になったと考えられる。表面がしっとりしているため、積んでも滑り落ちない。3段目くらいになると、凹凸にフィットする形や大きさを選んで積む様子が見られた。積み木やブロックよりも複雑な形をしていることが、年長児の形への興味、積むことへの意欲につながっているとも考えられる。また、泥粘土山のひび割れを見ただけで固まりを連想できたのは、この固まりに触れ、十分にかかわっていくうちに、その触覚的な特徴を視覚化できるようになったからではないだろうか。

(2) 主に触覚的な変化を楽しむ遊び

① 泥粘土を全身でこねる遊び <6月 年長児>

泥粘土の山のくぼみに水を入れて遊ぶ。どんどんやわらかくなる。表面がとろとろになってきた。全身でその感触を味わう。すると幼児は、手や足のかかどでぐっと押したり水と混ぜたりしながら泥粘土山をこね始め、固い部分もとろとろにしていった。



そして、そのとろとろをバケツに集めていった。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

- 泥粘土の様々な感触を楽しむ

・表面のつるつるした感触の心地よさ
 ・くぼみに溜まった泥水の感触の心地よさ
 ・泥粘土の質感の変化への気付き
 ・やわらかさを体感
 ・とろとろ感の心地よさ
 ・広範囲をとろとろにしたいという欲求

- とろとろを作る

・手や足のかかどで泥粘土をこねてみようという発想

- バケツに溜める

・とろとろを集めたいという思い

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

固い泥粘土の表面に水が付いている状態では、つるつる感が味わえる。もちろん肌で直接触らないとその感触は味わえない。また、水と混ぜり合った泥粘土が幼児の重みや動きによってやわらかい質感に変化していった。そこへさらに水が加わり混ぜるとろとろになる。幼児が遊ぶ中でその過程を体感し、理解したからこそ自らその状況をつくり出すことが可能になったと言える。この泥粘土と水が織りなす質感の段階的な変化が幼児に興味をもたせ、自分の

手足で泥粘土の質感を変化させる、溜める、という表現活動につながったと考える。

② 乾燥した泥粘土を削る遊び <6月 年長児>



泥粘土が水で流れて乾燥すると、小麦粉のようなとても手触りのよい粒子の細かい土の粉ができる。幼児らとその粉を発見し、たくさん集める。手の甲にのせたり、腕に塗ったりして遊ぶ。今度はある幼児がその粉を作るために、乾燥した泥粘土の固まりを削り始めると、その他の幼児も削りだした。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

- 泥粘土の粉を集める

・たくさん集めたいという欲求
・多いほど心地よい感触を味わえることへの気付き

- 泥粘土の粉の感触を楽しむ

・手や腕に塗るとすべすべなる心地よさ

- 乾燥した泥粘土の固まりを削る

・乾燥した泥粘土を削ることができるという驚き
・“削る”という、違う収集の仕方への興味の移行
・削る感触のおもしろさ

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

触感への心地よい驚きから生まれた遊びとも言える。乾燥した泥粘土の固まりは粒子が細かいため、

おろし器で削ることができ、またその感触や音が心地よい。削る感触が味わえると同時に、固まりが粉になるという視覚的なおもしろさが幼児の興味を引いているのではないだろうか。幼児の力でも簡単に削れて粉を作りやすいことも遊びが展開されていった要因と言えよう。

③ 「当てる」から「つける」、「飛び散らせる」遊びへ

<5月 年長児>



作った泥粘土の団子でコーティングしてあるベニヤでの的当てをして楽しむ。最初は枠の中に当てることを楽しむ。時々にくっつく団子があり、そのことに興味に移る。土と水の配分を考えて団子を作る。ある幼児は、隣の砂場から水分を含んだ砂をつかんで投げてみた。的にはくっつかなかったが、ベニヤに当たって飛び散った。今度は、その飛び散る感触を楽しみ始める。幼児らはどんだん的に近づいていった。

また、次の写真は、後日、的当て遊びから描画活動に発展していった場面である。

泥粘土の団子がベニヤにくっつき、それを取ろうとしたところから偶然始まった。ベニヤに付いた泥粘土の皮膜に触れると指の跡が付くことに気付き、何度も触ってみる。最初に跡を付けた上から重ねて描いたり消したりが自在にできる。描いているうちに表面が乾く。指の滑りが悪くなると乾燥し始めていることに気付く。新しい泥に手をつけて再び塗る。水分が多すぎると描いてもすぐ消える。とろみ加減のちょうどいい泥を探す。厚みをつけて塗ると指跡が際立つ様子をつかんでいく。



a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

○ 泥団子を的に当てる

- ・ベニヤに当たる音や感覚を楽しむ
- ・丸い的に当てようと挑戦する
- ・的にくっついた団子への興味

○ 的に泥団子をくっつける

- ・的にくっつく団子を作りたいという欲求
- ・作っては投げる、という試行錯誤
- ・自然材の探求・異素材（砂）を試してみるという発想
- ・砂の飛び散る性質への気付き
- ・飛び散ることへの興味とその感覚を味わいたいという欲求

○ 飛び散る感覚を楽しむ

- ・砂の団子の飛び散る音、飛び散り方への興味
- ・投げ方の強さ、的への距離と飛び散り方の関係を意識

○ ベニヤに描く

- ・指でベニヤに付いた泥をさわったときの感触のおもしろさ
- ・模様がつくこと、消えることの発見と興味
- ・濃度によって指跡の白さが際立つことへの気付き

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

水を混ぜて作った泥粘土の団子は崩れにくく投げやすい。ベニヤは幼児からは離れているが、「ゴン！」と当たる音が、触覚的な手応えを感じさせる。しかし、そのまま下に落ちてしまうための当たったかどうかは瞬間の視覚に頼ることになる。一方、水分を多く含んだ泥粘土の団子は、ベニヤの滑らかな面に吸着する性質をもち、その瞬間の「ペシャッ！」

という触覚的な感覚と共に、視覚的に形が留まるおもしろさがある。投げて描く造形とも言える。このことが幼児の興味を引いたと考えられる。また、くつつく泥粘土が柔らかいことから、砂の柔らかさが連想され、試すに至ったのではないかと推察できる。すぐそばにあって手にしやすいことも要因だろう。砂団子は粒子の粗さから飛び散りやすく瞬間的に視覚から消える。的に当たった際、粒子同士の瞬間的にこすれ合う音も小気味よい。この聴覚的なおもしろさも幼児の興味をとらえている。描画行為に移行した理由としては、ベニヤの表面が滑らかで、泥が吸着しやすい性質だったことがあげられる。このような体験を繰り返しながら、感覚的な遊びが視覚的な造形表現へとつながっていったと考えられる。また、複数の自然材が近い距離に混在する環境が、遊びを単一的なものとして終わらせることなく、楽しみ方や造形表現を広げる可能性を内包していることを示唆している。

(3) 具体的にイメージした物を作る遊び

① 赤土のケーキ作り

< 4月 年長児 >



ケーキを作りたいという願いをもった幼児が、平たい円錐形の型に、少し湿った赤土を入れる。逆さにして皿に空け、その上に葉っぱを2枚のせる。葉っぱを中央で重ね合わせ、ちぎり口を内側に置き、葉の先が外側に向くよう、対称に置く。一方を裏にして置く。さらに葉の重なった部分に石を探してのせる。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

○ 赤土の型をとる

- ・自分のイメージするケーキの形や大きさに合う型を選ぶ
- ・おいしそうな、魅力的なケーキにしたいという欲求

○ 赤土のケーキに飾りをつける

- ・摘んだ葉っぱがバランスよく赤土にのるようにしたいという思い
- ・形状のきれいな部分が見えるようにしたいという思い
- ・葉っぱの重なった部分に石をのせてみようという発想

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

赤土の飾り付けとして自然材の形や色、質感が生かされている遊びである。特に興味深いのは葉っぱの飾り付けの際の幼児の表現である。2枚の葉っぱは無造作に摘まれたためそのちぎり口ががたがたであった。ちぎり口を内側に向けて置くこと、また、重ねておくこと、石を置くことでほとんどその部分は隠れ、全体として一枚の葉っぱのように、また、対称的な配置になっている。

さらに、一方だけ裏返すことで葉の表裏の色や葉脈などの質感の違いが出ている。石を置いたことは2枚の葉っぱを押さえるという重量感を生かした実質的な役割と、赤土、葉を合わせた全体的な色彩バランス、質感の多様さを感じさせる造形的な役割を担っている。いずれにしても、幼児がどこまで自然材の造形的な性質をとらえているか、どう生かしたいかという思いが表現活動のあり方を方向付けていくことがわかる。

② 砂団子に土の粉をつける遊び<5月 年長児>



砂場の横に泥粘土の山がある。幼児は土の粉をつけた砂団子を作ってみたいと考え、自然材を集めてそれぞれ容器に入れ、テーブルに置いた。砂、水を混ぜて団子を作り、仕上げに乾いた泥粘土の粉を団子の表面に付ける。乾いた粉がぬれた手につかないように、また、砂団子の表面にまんべんなく土の粉がつくように転がす。

a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

○ 砂団子を作る

- ・ちょうどいい固さにしたいという願い
- ・手で丸めて崩れないか感触を確かめる
- ・固くするために力を入れて握る

○ 土の粉を砂団子に付ける

- ・手を動かしながら、土の粉がまだ付いていない部分を目で追う
- ・手の中で転がる感覚、土の粉がついていく感触を味わう
- ・団子の球面の一点に手のひらが触れるようにすれば、手に付かず団子に粉が付きやすいことに気付く

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

この事例では、水分を含む砂と乾いた土の粉が互いに吸着する性質を利用した遊びといえる。幼児がてきぱきと環境を準備している様子から、今までの生活経験や泥団子作りの経験から得た自然材に対する知識の習得が感じられる。ぬれた物には乾いた粉がよく付くという経験知があるのだろう。ここでは、水分を含んだ砂の黒っぽさと白っぽい土の粉の色の対比、砂のザラザラ感とさらさらした土の粉の触感の差が、丸い餅にきな粉、というような本物の団子の素材感を想起させる。また、作る工程も本物に近い場面設定となっていることが、幼児の表現活動を意欲的にしている。

③ 砂場の川作りから泥水遊びへ<5月 年長児>

幼児らが相談して砂場に川を作ることになった。コンクリート枠に沿って掘る、一本の川を3人で掘るなど様々である。最終的に1本の川につながり、水を流し込んだ。掘った箇所すべてに水がいくように高低差のある部分をならしていく。その後、川を飛び越えて遊ぶようになる。時々落ちて飛沫が立つ。今度は飛沫を立てて遊ぶようになる。



a. 遊び内容の変化と感覚や意識の変化

- スコップで掘る・つなげる

- ・砂がある程度湿っている箇所、コンクリートの淵など、掘っても崩れにくい場所を探す
- ・掘るときの「ザクッ」「シャキッ」という音や感触を味わう
- ・相手の掘った箇所につながるように目で確かめながら掘り進める

- 水を流す

- ・掘った箇所すべてに水を流したいという思い
- ・川の高低差をスコップの掘る感覚と水の流れを頼りに修正
- ・水が溜まっていくおもしろさ

- 川を飛び越えて遊ぶ

- ・川の部分、砂の部分を意識
- ・川に落ちないように飛び越えてみたいという思い
- ・飛び越える快感
- ・川に落ちたときの飛沫のおもしろさ

- 川の中に入って遊ぶ

- ・川の中に入ってもっと飛沫をあげてみたいという欲求

b. 遊びを生んだ自然材の特性と幼児の表現

この事例は、川作りというイメージのある遊びから、環境の変化に伴って、もともとイメージしていなかった泥水遊びに移行した例である。

水を流して川を「作る」という遊びが完結すると、幼児は新たな刺激や変化を求めていくことがわかる。ここでは、「川のある砂場」で味わえる遊びを幼児自身が見つげ出している過程が見て取れる。

飛び越える遊びは、砂場という「場」が川の部分と砂の部分を視覚的に分けて意識させて生まれた遊びとも考えられる。また、飛沫をあげる遊びは川そのものに意識が向き、水独特の性質を利用する遊びである。

ここでは、砂、水という自然材、また、その2つの自然材がイメージにつながれて表現された「場」という要因が、遊びを広げていった様子が見える。

3. 造形的遊びを生む幼児の感性

以上の事例から、造形的遊びを通して幼児が何を体験し、どのように造形表現を拓いていったのかを明らかにしてきたが、幼児の造形的遊びの現れ方は、幼児の感性がどのように自然材をとらえるかという側面と自然材の特性が幼児にどのような影響を与えるのか、という両側面から考えていく必要があることがわかった。

事例の考察の視点である幼児の感覚や意識の変化は、幼児の感性とのかかわりが深いと考える。事例では、遊びが変化していく過程で幼児の興味や対象のとりえ方も変化していったが、このことは、幼児自身が自然材のどのような特性に興味をもち、どのように感じ、とらえているのかということが影響していると思われる。「表現とは自分の内的・外的世界を感性によってかたちにする、ということ」⁽⁴⁾『感覚』とは、自己自身の習得した感じ方によってしか対象を感じる事ができない。『感じる』ということはずでに感覚を通して何かを判断していること⁽⁵⁾とあるように、幼児は、一人一人独自の感じ方を持っており、それが独自の造形的遊びにつながっていく。

さらに「幼児が自ら心身を用いて対象にかかわっていくことで、対象、対象とのかかわり方、さらに、

対象とかかわる自分自身について学んでいく」⁽⁶⁾とあるように、意欲をもって自発的にものにかかわっていくことが大切である。

また、前述した事例は、主に視覚や触覚にかかわる遊び、具体的にイメージした物を作る遊びについて述べたものであるが、もちろん「感覚は互いに関連し合ってわれわれの感覚や経験のすべてになんらかの影響を及ぼし、単に一側面からのみ解釈することはできない」⁽⁷⁾。

しかし、事例にみられる幼児の造形行為を丁寧に観察したとき、その幼児独自の感じ方、表現のし方があらわれていることがわかる。ローウェンフェルドは、目を媒介にして運動感覚的、触覚的経験を視覚的経験に変える傾向がある者のことを視覚型と位置づけているが、⁽⁸⁾ そのような感性をもつ幼児は、視覚的な情報や遊びを通して自然材の性質への知的理解を広げ、深めており、そのことが身体的な動きを誘発する表現につながっていると言えよう。

また、運動感覚的、触覚的経験を視覚的経験に変形せずに、触覚的または運動感覚的様式そのものに十分満足していれば、その幼児は触覚型である、としており、⁽⁹⁾ 触覚的な感覚は身体の動きと平行して起こり、自然材から受ける心地よい感覚刺激が大きいほど動きも大きくなる、と述べている。このことから、自然材における触覚的な質感が多様であるほど動きも多様になっていくことが考えられる。また、その動きの大きさや多様さが自然材の質的な、または形状の変化をもたらしていくという造形表現の広がりや循環が事例から感じとれる。

さらに、視覚と触覚について中村雄二郎氏⁽¹⁰⁾は、ルソーの言葉を引き、「視覚は諸感覚の中でももっとも迅速で広範囲に及ぶ感覚だが、同時に、もっとも誤りを犯しやすく、もっとも人を欺きやすい」としている。その視覚の欠点を免れるための方法の一つとして、「視覚」と対照的な「触覚」を用いることを挙げており、視覚の性急さを触覚の鈍重ではあるが確実な知識によって抑制するのである、としている。傳田光洋氏⁽¹¹⁾は、皮膚には脳と同じ受容体が存在する「考える臓器」であること、また、環境からの情報の流れが皮膚によって全身に大きな影響を与えていると述べており、触覚的な刺激が思考を伴う表現活動に及ぼす影響の大きさを予想することができる。

これらのことから、視覚や触覚は幼児の感性に深

くかかわっており、どのような造形的遊びを生むのか、ということに影響を与えていることがわかる。

4. 表現を拓く自然材の造形的な可能性

本研究では、砂、泥粘土、赤土に焦点を当てて考察してきたが、自然材は、その材一つをとっても、水分量や粒子の粗細で全体の質感が変わり、形状が変わり、色が変わり、幼児の感性に影響を与えて造形的遊びが変化していったことが明らかになった。

具体的に述べると、主に視覚的な変化を楽しむ遊びでは、赤土がムース状である場合、指や道具の跡がはっきりつく、それによって手や道具の形状に気付く、という経験をしている。乾いた砂の模様遊びでは、容器による立体造形が可能であり、定形を生み出せる。泥粘土の塊を並べる・積む遊びでは、滑りにくい質感が視覚的連続性を伴う遊びを可能にしている。ケーキ作りの場合は、飾りという意識が強いため、自然材の形状や色が幼児の表現に影響を与えている。

一方、主に触覚的な変化を楽しむ遊びでは、泥粘土と水が混ざり合ったとき、感触の心地よさを感じ、その心地よさをさらに感じたいという欲求が身体の動きを誘発している。その過程で自然材の質感が変化し、その変化を体感している。泥粘土を削る遊びでは、塊が削れていくという触感と形状の大きな変化が幼児の造形表現に好奇心や意欲を呼び起こす。また、団子の的当ての場合は、表面が滑らかなベニヤによって多様な質感の素材を試すことにつながった。

このように、幼児が色や形や質感が豊富な自然に主体的に触れていく造形的遊びは、感じる力、対象をとらえる力を確かなものにしていくと考えられる。また、主体的であるということは、かかわる対象を自分の興味・関心を基に選択しているということでもあり、自分らしさの表現への入り口でもある。遊びという総合的な活動だからこそ、友達関係の広がりも含めた楽しみ方の多様な変化の中で自分の思いや感覚、動きを、自分なりの豊かな表現として開花させていくことができるのではないだろうか。ここに「造形的遊び」がもつ内容の広がりを感じ、意義を見出すことができると考えるのである。

さらに、自然材を内包する環境を造形的環境として大きくとらえ、そこに働く幼児の感性を考えると、その造形的な表現の可能性がより広がることが

予想される。

前出中村は、単に五感だけでなく、「人間的自然としての感性が人間の文化や社会とともに形成されたものである」⁽¹²⁾ ことに言及したが、感性を「感覚そのものではなく感覚の働かせ方」「人間が感覚によって内的・外的な世界をとらえる能力」として、また、感性は育てることのできるものであり、「自分から世界のイメージを作り上げるもの」⁽¹³⁾ という教育可能な領域として積極的な意味をもたせていることと合い呼応している。これらのことから、感覚の働かせ方を学び育てることによって、対象を感じ取る力が養われていくということがわかる。また、自然材を通した造形表現は視覚や触覚から主に語ることができるが、その二つの感覚が相互に支え合うことで確実なリアリティを生じさせることができる。ここに「感性を育てる」という造形表現の教育的な意義が生まれる背景もあるのだろう。

おわりに

幼児にとっての造形的遊びは、自分なりの思いや願い、イメージを表現することが可能な活動であり、さらに、表現の幅を広げ、表現する喜びを感じることができる活動であるにとらえている。また、その表現する喜びが生きる力の基礎ともいべき生きる喜びとなっていくと考える。今後は、砂・泥粘土・赤土以外の自然材についても表現を拓く可能性を追求していきたい。また、自然材にかかわる手段としての道具や用具も幼児にとっては重要な造形手段であり、様々な造形を生み出す要因でもあるため、自然材との造形の間関係を考察していく必要があると考えている。

いずれにしても、「人間の類型と同じだけ多数の芸術の類型があり、しかも芸術の分類は、人間の分類におのずから対応すべきである」⁽¹⁴⁾ というリードの言葉からは、自然の中には“その人”なりの感性を刺激するもの、“その人”なりの造形表現を拓く可能性があることを感じさせてくれるのである。

付記 本稿は、主として石倉が取り組んだ研究を基に、石倉が執筆したものであり、主旨を明確にする目的で、竹井が若干の修正を加えた。

註

- (1) 幼稚園教育要領解説 (1999)：感性と表現に

関する領域「表現」 pp. 123-136

- (2) 小学校学習指導要領解説 図画工作編 (1999)：A表現 p. 19
- (3) 竹井 史 (2002)：『幼児の自由遊びとその援助』 pp. 96-97 明治図書
- (4) 西村拓生/竹井 史 (1998)：『子どもの表現活動と保育者の役割』 p. 45 明治図書
- (5) 中村雄二郎 (1975)：『感性の覚醒』 pp. 177-178 岩波書店
- (6) 幼稚園教育要領解説 (1999)：環境を通して行う教育の特質 p. 25
- (7) V・ローウェンフェルド (1979)：『美術による人間形成』竹内 清、堀内 敏、武井勝雄共訳 p. 333 黎明書房
- (8) 同上書, pp. 330-331 黎明書房
- (9) 同上書, p. 332
- (10) 中村雄二郎 (1975)：上掲書, p. 179
- (11) 傳田光洋 (2005)：『皮膚は考える』 pp. 1-4 岩波書店
- (12) 中村雄二郎 (1975)：上掲書, p. 277
- (13) 西村拓生/竹井 史 (1988)：上掲書, pp. 13-17
- (14) ハーバード・リード (2001)：『芸術による教育』宮脇 理、岩崎 清、直江俊雄訳 p. 48 フィルムアート社

(2006年5月22日受付)

(2006年6月28日受理)